

カタクチイワシの愛情弁当

お味噌汁のだしに用いられるにぼしや、釜揚げかまあげされた小さくて白いしらす。これらはカタクチイワシを加工したものです。日本沿岸の表層域に大きな群れで生息するカタクチイワシのメスは、春から秋にかけてひたすら卵を産みます。しかし、長期間にわたり海水温が約10～28℃と大きく変動するため、稚魚のエサとなるプランクトンが増減しやすく、稚魚の生存率に影響が出ます。

そこで、母魚が用意するのが、卵黄という「栄養たっぷりのお弁当」です。低水温ではプランクトンが増殖しにくいので、孵化ふかした後すぐにエサを捕れない可能性があります。そのため、卵黄をたっぷり含んだ大きめの卵を生むことで、しばらくの間生き延びることができます。しかし、母魚が蓄えられる栄養と卵巣のスペースは限られてい

るため、産卵数は減ります。逆に、高い水温下ではプランクトンが豊富にいるため、卵黄の含有量が少ない小さな卵をたくさん産むようになります。このとき、サイズが小さいと他の魚による捕食の危険性が高まりますが、産卵数を多くすることで、卵や稚魚の時期に大量に捕食される影響を小さくしているのです。実際、体重20gのカタクチイワシは水温15℃のときには約4000個、25℃では約10,000個の卵を産み、水温が7℃上昇すると卵のサイズが20%程度小さくなることがわかっています。

年間35万トンと、日本第3位の漁獲量を誇るカタクチイワシ。年ごとの変動が少なく、いつも安定した量が私たちの食卓に届けられる裏には、お母さんのたっぷり注がれた愛情と工夫があったのですね。(文・小橋 優子)



▲カタクチイワシの卵。

カタクチイワシ

ニシン目カタクチイワシ科カタクチイワシ属

学名: *Engraulis japonica*

英名: Japanese Anchovy



協力：鈴廣かまぼこ株式会社



さかな♥部ラブで、カタクチイワシクイズに挑戦しよう！

<http://www.sakanalab.com/>

画像提供：神奈川県立生命の星・地球博物館 撮影：瀬野 宏さん (カタクチイワシ)

京都大学 舞鶴水産実験所 准教授 益田 玲爾さん (卵)

部員募集中！空メールをお送りください。

